



左上／収穫されたピーマンは鮮やかな緑色で光沢がある 右上／現在は8棟のビニールハウスでピーマンを生産中 下／丹精込めて育てたピーマンに囲まれ、将来の夢を語る彰紀さん

### 農業のハジメカタ

農業者の中には、農業に魅力を感じ、新たに挑戦する人たちがいます。焼石連峰を望む、胆沢小山のハウス団地。幾つものビニールハウスが立ち並ぶこの地で、佐藤彰紀さん(38)はピーマンの栽培を行っています。

胆沢小山の専業農家に生まれた彰紀さん。大学を卒業後、民間企業へ就職しました。ある日、会社勤めをしていた友人が両親の急逝で農業を継ぐ

ことになり、大変だったという話を耳にします。「若いうちに勉強をしなければ」と感じた彰紀さんは、31歳で会社を退職し、就農を決意します。実家の農作業は手伝っていたものの、農業初心者だった彰紀さんは、JA岩手ふるさととの「農業マイスター制度」を活用することにします。1年間、給料を貰いながら農法人で基本的なことを学び、翌年に父親の下で就農しました。平成30年にJA主導でハウス団地が造られると、これに応募。ビニールハウス4棟を借りて、経営者としての一歩を歩み始めました。

「新規就農でハウスを建てるには資金面などの壁があります。そういう面では良かったと思います」と当時を振り返ります。ピーマン単価の変動や病害虫のトラブルに見舞われることもありましたが、そのたびに自身の努力と周囲の協力で乗り越えてきました。農業の魅力について尋ねると「自分の考えで自由にできるところ」と話す彰紀さん。「まだまだ経営は安定していませんが、ゆくゆくは実家の経営を継承し、地域貢献や雇用創出にもつなげられたら」と将来の夢を思い描いていました。

### それぞれの未来へ

私たちは、はるか昔から農業を営み命をつないできました。しかし、農業を取り巻く環境の変化によって、その営みが途切れる恐れがあります。今回取材した人たちは、農業の将来を憂い、続けていくための未来を思い描いています。嘉春さんは、20年ほど農業をしてきた中で「お前がいてくれて本当に良かった」と言われる場面が何度もあったそうです。世の中に必要とされ、生きていると感じられる——その場所がここなのだと話していました。人口減少が進む奥州市では、今後さらに農業の担い手が減り、それは地域の景観や共同活動で培われてきた「結い」など地域コミュニティにも影響します。

※人・農地プラン…地域の話し合いに基づき、現状や課題を共有し、将来の農業の在り方などを明確化した計画。現在は市内30地区をカバーした45のプランがある



自慢の美しい風景を眺め笑顔を見せる嘉春さん

### スマート農業の進展

花の卸会社に勤めていたころ、仕事で全国を歩いていたという嘉春さん。いろいろな見てきた中でも、家の前から見える藤里の里山風景が一番美しいと感じるそうです。管理は大変ですが、集落営農組織の仲間たちと共に、その美しい景色を守り続けています。

将来について尋ねると「最後はここから見える100畝全部を管理するぐらいの覚悟でいます。そのためには、周りの人たちが1年でも長く米作りを続けてほしいと思っています。最低限、見える範囲は頑張りたいですね」と白い歯を見せました。

人手不足に悩んでいる農業に心強い味方が現れています。それは、スマート農業と呼ばれる新たな農業です。ロボット技術や情報通信技術を活用して労力を省き、高品質な生産を実現するもので、大きな期待が寄せられています。

スマート農業の普及に当たる奥州農業改良普及センターの佐々木洋一技術主幹によると、管内でも徐々に導入が進んでいるそうです。水田では、水田管理システムが実証ほ場を中心に導入されています。水田に設置したセンサーにより、遠隔地の水田の水位や水温をスマートフォンなどで確認できます。給水バルブの開閉も遠隔操作が可能なので、水管理の負担が軽減されます。

畜産の分野では、分娩監視カメラや発情発見器などの導入が大規模経営体を中心に進んでいます。また、情報通信技術を利用して遠隔で牛の状態を把握することにより、事故防止と省力的な飼養管理が進んでいます。この他にも、位置情報を利用した自動操舵

トラクターや、ドローンによる薬剤散布、ビニールハウスの環境制御装置など、さまざまな部門でスマート農業の技術が入り始めています。

それではスマート農業の導入によって、どのような効果があるのでしょうか。佐々木技術主幹によると、誰もが取り組みやすい農業になるだけでなく、作物の能力を最大限に発揮できるようになるそうです。農作業の自動化・効率化によって作業負担も軽減されます。農作業技術を習得するハードルが下がり、従事者の増加も期待できます。

佐々木技術主幹は「費用対効果の面で十分な検討は必要

ですが、さまざまな課題に対応するため、さらにスマート農業を活用する場面が多くなるでしょう」と今後の見通しを語ります。農家や農業関係機関と連携しながらスマート農業の導入を進め、より良い農業を目指していくそうです。



スマート農業について語る佐々木技術主幹



左上／自動操舵トラクターを使用した大豆の種まき 左下／ハウス内で不足しがちな二酸化炭素を循環させる環境制御装置 右／遠隔操作で給水バルブの開閉などができる水田管理システム(写真提供:奥州農業改良普及センター)

### 新規就農への主な支援

- 就農相談窓口の日  
毎月第2 ㊦ 曜日の午後に相談に応じます。  
㊦ 奥州農業改良普及センター (☎ 35-6741)
- 胆江地方ニューファーマー制度  
地域の主要品目で新規就農を希望する人が要件を満たす場合に、就農準備から就農まで支援が受けられます。  
㊦ 奥州農業改良普及センター (☎ 35-6741)
- 市農業経営開始資金  
新規就農者が要件を満たす場合、最長3年間、年間最大150万円の交付が受けられます。  
㊦ 本庁農政課農政係 (☎ 34-1582)
- 農業マイスター制度  
就農1年目はJA岩手ふるさとの特別臨時職員として研修し、2年目は自立しながら指導や助言が受けられます。毎年4月開始。  
㊦ JA岩手ふるさと (☎ 41-5208)

予想図の実現を目指して、※「人・農地プラン」の話し合いなどをきっかけに、次の世代へどのように農業をつないでいくか考えていきましょう。